

「読解力」を高める古典指導の在り方

- 小・中・高等学校の連携を図る授業実践を通して -

教科研究室 沖田 浩史

【要 約】

学習指導要領改訂の要点に古典指導の重視が挙げられ、古典指導においても、「読解力」を高める授業改善が求められている。そこで、小学校では神話の読み聞かせ、中学校では『古事記』の現代語訳による比べ読み、高等学校では『古事記』と『日本書紀』の比べ読みを通して、読解力を高めるための授業実践を試みた。それぞれの校種で古典に親しむ態度が育成され、登場人物の心情について理解を深めるなど読解力の向上が見られた。

【キーワード】 国語 読解力 古典指導 比べ読み 古事記

1 研究の目的

平成15年に実施されたPISA調査の結果を受けて、文部科学省は、平成17年12月、「読解力向上プログラム」をとりまとめた。昨年度の研究において、小・中・高等学校の国語指導者に対する意識調査を行ったところ、「読解力向上プログラム」について「大体的内容を知っている」と回答した指導者は、全体の10.5%であった。また、平成18年度に実施されたPISA調査においても、読解力についての課題が克服されていないことが明らかになった。

一方、国語科における学習指導要領改訂のポイントとして、文部科学省は、伝統的な言語文化としての古典に関する指導の重視を挙げている。高等学校では、平成17年度教育課程実施状況調査において、古典を読む能力、古典に関連する知識・技能についての課題が指摘された。今後、小学校から高等学校までを見通した古典指導の系統性が、一層重視されるであろう。

以上のことを踏まえて、本研究では、「読解力」を高める古典指導の在り方について研究することとした。古典指導において、小・中・高等学校の連携を図り、古典に親しむ態度を養いたい。また、「読解力向上プログラム」を基にした授業実践を通して、古典の読解力、つまり、「古典を理解し、評価する力」を高めたいと考え、本研究題目を設定した。

2 研究の内容

「読解力」を高めるための授業改善

ア 昨年度の実践

昨年度は、「『読む能力』を高める指導法の研究 - 文学的な文章の『比べ読み』を通して - 」という主題で、研究に取り組んだ。その結果、次の3点を成果として挙げることができた。

「比べ読み」を通して、作者の意図に目を向けることができるなど、作品を読む生徒の視点が広がった。意見の交流、相互評価を通して、生徒が主体的に読解に取り組んだ。

「比べ読み」の対象として、文学作品だけでなく、生徒が書いたものも読み比べることができた。

イ 本年度の研修講座における取組

昨年度の研究を踏まえ、本年度、愛媛県総合教育センターにおいて、読解力向上のための研修講座を6回実施した。講座終了後、研修に参加された先生方から、国語科という教科の枠を超えた読解力向上のための授業改善について、意見をいただいた。

例えば、図画工作では、自分が制作している作品のこだわっている部分について語る場を設定するか、保健体育では、生徒たちが解決方法や練習方法の違うテキストを読み比べ、分析して、自分たちで解決方法や練習方法を選択する、などの意見が寄せられた。いずれも、学習者の批評活動や交流活動を取り入れた授業改善の方法が挙げられている。読解力向上についての理解が深められ、研修の一定の成果が上がったものと考えられる。

ウ 児童・生徒、指導者の意識調査

「読解力」を高めるための授業について、県下の指導者がどのような意識を持っているかを調査した。

調査対象：小学校82名、中学校22名、高校17名の
国語の指導者（教育センターの研修講座受講者）
調査期間：平成20年6～10月

国語の授業で、自分の考えを述べたり書いたりする機会の設定について尋ねたところ、「多く設定している」と答えた指導者は、小学校では84.0%、また、どの校種でも最も多いという結果であった（図1）。

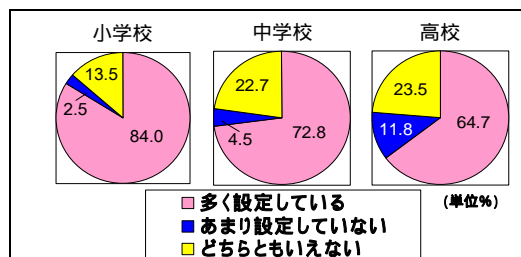


図1 自分の考えを述べたり書いたりする機会

一方、平成20年度全国学力・学習状況調査において、「国語の授業で自分の考えを話したり書いたりしていますか」という問いに、「そう思う」「どちらかというと思う」と回答した愛媛県下の小学6年生は56.6%、中学3年生は45.3%であった。児童・生徒と指導者の間に意識の差があることが分かる。

また、「読解力向上プログラム」に記されている言語活動のうち、「文章の内容や形式などの解釈、理解」については、どの校種においても、約4分の3の指導者が「重視している」と回答したのに対し、「文章の内容などの要約、紹介」について「よく行っている」と回答した指導者は、小学校で51.2%、中学、高校と少なくなっている。「文章の内容や表現効果などの批評、評価」について「よく行っている」と回答した指導者は、どの校種も4分の1を下回る結果となった(図2～4)。

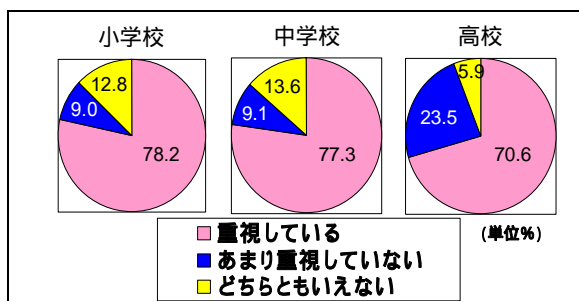


図2 文章の内容や形式などの解釈、理解

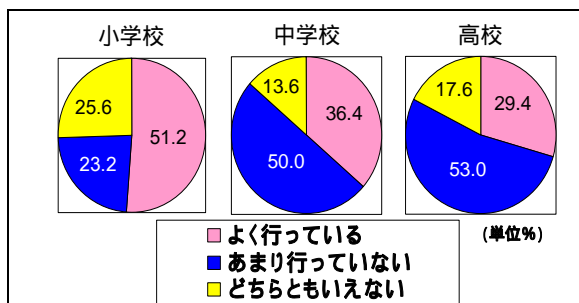


図3 文章の内容などの要約、紹介

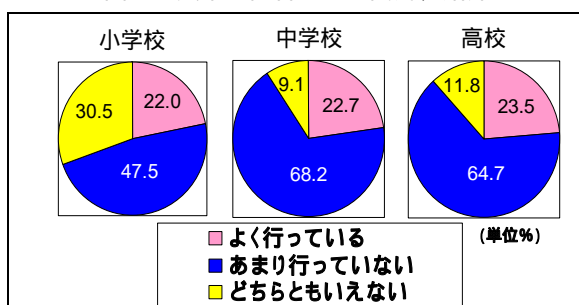


図4 文章の内容や表現効果などの批評、評価

工 新学習指導要領における古典指導の重視

平成20年3月に告示された学習指導要領の改訂の要点として、「伝統的な言語文化に関する指導の重視」が挙げられた。小学校第1学年及び第2学年では「昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせ」が、第3学年及び第4学年では「易しい文語調の短歌や俳句の音読や暗

唱」が、指導事項として記されている。また、小学校では、伝統的な言語文化に関する指導を各学年で行い、古典に親しめるよう配慮すること、中学校では、古典に関する教材について、古典の原文のほか、古典の現代語訳や古典について解説した文章などを取り上げることが記されている。

平成20年4月に実施された全国学力・学習状況調査において、中学校では、古典を素材とした問題が多く出題された。その中でも、「虎の威を借る狐」と「馬盗人」は現代語での出題であった。また、小学校、中学校ともに、複数の文章や資料を比較して読ませる問題が出題された。新学習指導要領や読解力向上を意識して出題されていることが分かる。

オ 「読解力」を高める古典指導

(7) 題材の選定

学習指導要領の改訂を踏まえて、小学校低学年に読み聞かせをするのに適当な「神話・伝承」は何か、と尋ねたところ(調査対象、期間はウに同じ)、多かった順に「いなばのしろうさぎ」「やまたのおろち」「12支のはじまり」「七夕の伝説」「天の岩戸」「ヤマトタケル」「海幸と山幸」という結果になった。物語を特定せずに『古事記』と回答した指導者も多かった。そのほか、地元や地域に関連した昔話という回答も多く得られた。

『古事記』は高等学校の古典の教科書に掲載されている。意識調査に御協力いただいた高校の指導者17名のうち、これまで『古事記』を指導したことがあると回答した指導者は2名、自分が高校時代に『古事記』を学習したことがあると回答した指導者は4名であった。『古事記』は、日本最古の書物とされ、文学性の豊かな教材ではあるが、教育現場から離れていることがうかがえる。

本研究の授業実践に当たっては、小・中・高等学校の連携を図ることを考え、『古事記』の中の神話を教材として取り上げることとする。

(1) 授業改善の方向性

平成17年度の高等学校教育課程実施状況調査では、古文や漢文の学習を好きではないと回答した生徒が、それぞれ4分の3近くいた。また、古典を読む能力、古典に関連する知識・技能についての課題が指摘されている。昨年度の実践、及び、児童・生徒、指導者を対象とした様々な意識調査を踏まえ、「読解力」を高める古典指導のための授業改善の方向性として、次の三つを挙げ、授業実践に取り組むことにした。

- 『古事記』の神話を教材として取り上げる。
- 『古事記』を教材として「比べ読み」をさせる。
- 書く活動、批評、交流活動を意識的に取り入れる。

小・中・高等学校で同じ古典を取り扱うことにより、古典に親しむ態度を育成することができる。また、昨年実践を踏まえ、「比べ読み」を通して読む能力を高め、書く活動や、書いたものを批評する活動などによって、読みの深まりが期待できるものとする。

小・中・高等学校の連携を図る授業実践

ア 中学校の実践

中学生にとって、『古事記』の原文を読むのは難しいことである。そこで、多くの『古事記』の現代語訳の中から、物語の長さや文体の分かりやすさを基準にして、『古事記物語』（福永武彦 岩波少年文庫 1957）に収められている「オオクニヌシノ神の冒険」と「海幸と山幸」を選び、図5のワークシートを活用して、比べ読みを実施した。授業の概要は、次のとおりである。なお、以下の説明 ~ は、図5の ~ と対応している。

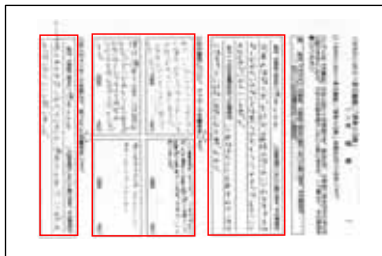


図5 「比べ読み」ワークシート(中学生)

「オオクニヌシノ神の冒険」と「海幸と山幸」を読み比べて、どちらを小学2年生に紹介した

いかを選び、その理由を書かせた。読みの観点を与えることで、物語を批評させることを目的としている。また、書くことに対する抵抗感を軽減させるために、書く「型」を提示した。

小学2年生に紹介するのにふさわしい作品に対する友人の意見について、相互評価させた。物語だけでなく、自分たちが書いたものも批評させることが目的である。クラスの友人からの評価を受け、新しく気付いたことをまとめさせた。

全生徒の意見の中から、物語の主題に迫っているものや着眼点のよいものを取り上げ、全員に紹介し、そこから新しい気づきが導き出せるよう支援した。以下は、全生徒に紹介したものの一部である。

「オオクニヌシノ神の冒険」について
 小学2年生に親切の大切さを教えたい。
 心優しい人がハッピーエンドを迎えるところがよい。
 少し残酷すぎる面があるので、小学2年生に紹介するのはやめた方がよいと思う。

「海幸と山幸」について
 善を尊び悪を懲らしめる話でよい。
 兄弟の話で、浦島太郎に似ているから、小学2年生にはよく分かるのではないかな。
 弟が兄に仕返しをするような話はよくない。

メッセージのやりとりを終えて書かせた意見には次のようなものがあった。

自分が思っていることと同じような意見が出てよかった。また、「海幸と山幸」を、子どもの定番の話という意見があったが、それには賛成できない。みんなの感想を読んで、人が死ぬことや、「殺す」という表現は、小学2年生にはよくない表現だと分かった。また、よいことをするとよい思いができるという話がよいということも分かった。

私は「海幸と山幸」を選んだが、他の人の考えを読んで、目からウロコだったこともある。それは、山幸も悪いということだ。原因を作ったのは山幸だから、少し心が揺らいた。

自分と違う考えに心が揺れたり、新しい読みに気付いた上で反論したりしている。メッセージのやりとりを終えた段階で、物語を自分の観点で批評することができる生徒は95%であった。批評、交流活動を取り入れた授業改善の方向を示すことができたと考えられる。

イ 小学校との連携

最終的に、中学生の多くが選んだ「海幸と山幸」を、紙芝居にして小学2年生に紹介した。



図6 紙芝居の様子

図6は、実際に紙芝居をしている様子である。中学生が、紙芝居を制作するに当たって工夫したところは、どこで場面

を変えようかという場面分け、海の色の時間帯による色分け、元の文章を小学生にも分かりやすく直して書くことなどで、要約力や表現力を必要とする活動であった。

小学生から、中学生に向けてメッセージを書いた（図7）。紙芝居を見た後で小学2年生にアンケートを取ったところ、「楽しかった」と答えた児童は32名中32名、



図7 小学生からのメッセージ

「よく分かった」もしくは「だいたい分かった」と答えた児童は31名であった。また、「海幸と山幸」の話を知っていたと答えた児童は5名であった。初めて聞く話であっても、中学生が作った紙芝居であっても、大変興味を持って、身を乗り出すように聞いていた。神

話の読み聞かせを通して、古典に親しむ態度を育成することができたと考える。

ウ 高校の実践

高校生には、『古事記』と『日本書紀』の比べ読みを実施した。題材は、多くの古典の教科書に掲載されている「倭建命（やまとたけるのみこと）の物語」を選んだ。『古事記』と『日本書紀』では、主人公の性格や、東国平定に向かう際の心情など、多くの違いが見られる。テキストの作成に当たっては、原文でも現代語訳でも比べ読みができるよう工夫した（図8）。

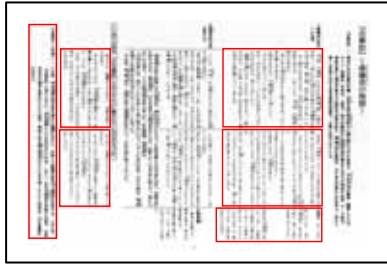


図8 比べ読みテキスト（高校生）

この部分の上段は『古事記』の原文、中段は現代語訳、下段には理解を促すための「語注」という構成にした。この部分の上段には『日本書紀』の原文、下段には現代語訳、また、この部分には、『古事記』と『日本書紀』の違いを簡単に説明した文章を掲載している。全部で5ページにわたる比べ読みのテキストを作成した。

読み比べる前に、次の三つの課題を先に与えた。

『古事記』の物語と『日本書紀』の物語を読み比べてどちらが好きか。また、そう考える理由を書こう。主人公が、死後、白鳥になって空を飛んでいく場面を物語全体の中に入れた方がよいか、入れない方がよいか。また、そう考える理由を書こう。故郷に帰るのを目前にして亡くなった倭建命に手紙を書こう。

課題の1は、作者の意図に目を向けさせ、それぞれの物語を批評、評価させること、課題2はロールレタリングという手法で、登場人物の心情をより深く理解させることを、それぞれ目的としている。また、いずれの課題も、書くことを通して読みを深めることを目的としている。生徒は、三つの課題のうち一つを選び、自分の考えを書く。その後、それぞれの考えを相互評価させた。手紙を書くことを選んだものについては、その返事を書かせた。

以下に、生徒の主な意見を紹介する。

課題

日本書紀では弱音も吐かないしっかりした倭建命が描かれているけれど、古事記では叔母の倭比売（やまとひめ）に泣きごとを言って涙を見せる、倭建命の弱さも描かれ、人間らしさも見られて読みやすかった。古事記の倭建命は父親が恐れるほどの性格で、少しこ

わいところがある。日本書紀の方が本当の英雄で終わる感じがして好きだ。泣きごとを言わないところもいいと思う。

簡単に出来事の流りが理解できそうなのは日本書紀だと思う。「読み物」として楽しむのであれば、古事記の方がいいと思う。

最後の意見は、それぞれの古典の文学作品としての価値に気付いている意見である。

課題

白鳥になって天空に飛んでいったと終わらせる方が、故郷をどれだけ愛していたか表現できていると思う。最後まで気にしていた「草なぎの剣」について触れていない終わり方に違和感を覚えた。

課題

自分の父親に、故郷に戻れないようにさせられて、とてもつらい思いだったと思います。亡くなる直前まで歌を詠んでいたことから、大和へはもう帰れないと悟りつつも、帰りたいという気持ちを抑えることはできなかったのだと思います。

このように、登場人物の心情を深くとらえている意見や、表現の呼応に気付くことができている意見については、全員に共有できるようプリントにして配付した。

高校での実践を通して、次の3点を成果として挙げる。

古典における表現上の特徴に気付くことができた。登場人物の立場や心情について理解を深めることができた。

『古事記』『日本書紀』それぞれの、文学としての独自性に気付くことができた。

3 まとめと今後の課題

「読解力」の向上を目指す授業実践を通して、読解力を高めるための、古典指導における授業改善の一つの方策を提案することができた。また、小・中・高等学校において、『古事記』という同一作品を扱った授業実践の可能性を示すことができた。

今後は、他の古典作品で、小・中・高等学校の連携を図る授業実践について検討したい。その際、新しく発行される小・中学校の古典教材について分析するとともに、地域の古典教材を開発したいと考えている。また、小説や古典以外の教材、例えば評論、韻文、図表などにおいても、読解力を高める指導の在り方について研究と実践を進めたい。

主な参考文献

三浦和尚 『「読む」ことの再構築』三省堂 2002
大槻和夫編 『国語科重要用語 300の基礎知識』明治図書 2001